

第40回国際応用動物行動会議への出席および 障害者乗馬施設の視察

柏 村 文 郎

畜産科学科食料生産科学講座教授

1. 目 的

イギリスのブリストルで開催された第40回国際応用動物行動会議（ISAE2006, Bristol）に岩手連合大学院2年生の齊藤朋子さんとともに出席し、ポスター発表を行なうとともに、ブリストルおよびオランダ・アムステルダム近郊の障害者乗馬施設の視察を行なう。

2. 期 間

平成18年8月6日から8月16日

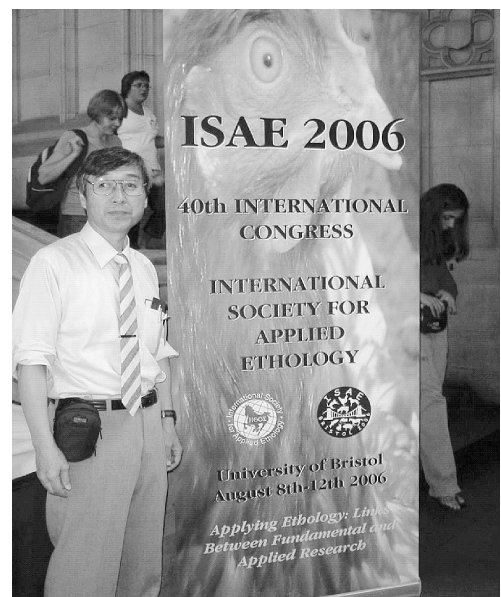
3. 場 所

イギリス・ブリストルおよびオランダ・アムステルダム

4. 内 容

1) 国際応用動物行動会議（International Congress of the International Society for Applied Ethology：ISAE）はヨーロッパを中心として世界各国で毎年開催されている家畜行動に関する国際会議である。一昨年（平成17年）は東京で開催され、これはアジアでは初めての開催であった。当時岩手連大1年生の齊藤朋子さんはその大会でポスター発表し、ベストポスター賞を受賞する榮譽に輝いた。その時、次回の大会の参加費は無料という副賞もいただいた。このような事情の下、今回の国際応用動物行動会議出席（ISAE2006, Bristol）に至った。私は彼女の指導教員として同行した。

最近、日本でもアニマルウェルフェア（動物福祉）の言葉を目にする機会が多くなり、帯広畜産大学の学



ブリストル大学の会場にて

生や教員では知らない人はいないのではないかと思う。このアニマルウェルフェアの問題が今の ISAE 学会のメインテーマである。対象動物は様々である。産業動物としてはウシやブタ、ヒツジ、ニワトリ、伴侶動物として馬（産業動物の側面も持つ）や犬に関する発表が多い。また、動物園の展示動物、家畜が野生状態に近い環境下で生活している再野生動物（feral animal）も対象である。

今回の会議はブリストル大学が運営にあたり、8月8日受付とウェルカムレセプション、9日講演・研究発表、10日午前講演・研究発表と午後エクスカージョン、11日講演・研究発表と夜バンケット、12日講演・研究発表と夜フェアウェルパーティーというスケジュールであった。事務局からの発表によると、参加国29カ国、参加者382名、招待講演5題、口頭発表110題、ポスター発表145題、受けたEメール10,159件とのことであった。この規模はこれまでで最も参加者の多い大会であったことが報告された。日本人は私たちを含め11名が参加した。プロシーディングは294ページに及ぶ分厚いものであった。今回の会議のスポンサーは、アニマルウェルフェア発祥の地である英国の RSPCA（The Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animal：1824年設立）および UFAW（Universities Federation for Animal Welfare：1926年設立）という世界のアニマルフェアのリーダー的存在の組織であった。この会議の参加者の特徴は、若い世代が多いことと女性が多いことであった。アニマルウェルフェアの運動は市民運動であるが、動物の苦痛を客観的に評価するのは動物行動科学者の仕事であるとの認識がある。初期の応用動物行動学は、動物行動の立場から、放牧家畜の行動や合理的・省力的な家畜の管理方法を模索する研究が多かったが、もはやアニマルウェルフェアおよび動物と人間の関係の研究が圧倒的に多くなった。まさに時代の流れを感じる大会であった。

2) 障害者乗馬施設の視察としてブリストルでは Avon Riding Centre for the Disabled を訪問した。場所はブリストルから車で15分程度の郊外で、緑の多い Blaise Castle Park の一角にあった。このセンターがオープンしたのは1983年で、時間をかけて次第に規模、内容ともに大きくなってきたとのことであった。これはイギリスの RDA の組織のもとで設立された組織で、目的は乗馬を通して障害者の多様な出会いと自立、幸福を増進させるものであると記されている。現在200名以上の障害をもった子どもや大人が通っている。国際競技実施可能なサイズのインドアアリーナ（屋内乗馬施設）、屋外馬場、林のなかの馬の散策コースが整備されていた。10数頭の馬とポニーが繋養されていたが、私たちが訪れたときは夏休み中ということで、残念ながら活動自体は見る事が出来なかった。しかし、ディレクターの Mrs. Gill Edwards さんに案内していただき大いに参考になった。

帰途にアムステルダムに立ち寄り、Vpg-amsterdam という障害者乗馬の施設を訪問した。ここもあいにく夏休み中ということで活動していなかった。日本を出発する前に事前連



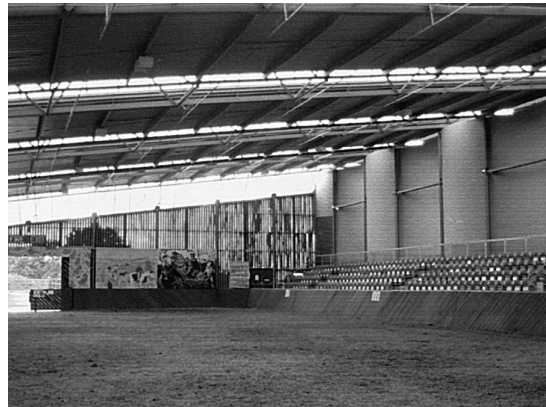
ブリストルの街角で出会った騎馬警官

絡を試みたがレスポンスがなく、突然訪問したのである。偶然、そこに居合わせた Mrs. Maria Gevers というご婦人が施設の案内と概要を話してくれた。施設はたいへん合理的に出来ており、一つの屋根の下に、厩舎、屋内馬場、広い休養ルーム、事務室が一体となって入っていた。ほとんどの馬は休養のため放牧地に出ており、見ることは出来なかったが、馬房数からみて20頭近くいるのではないかと思われた。ホームページはオランダ語でかかれており、詳細な活動状況は分からなかったが、乗馬施設のレイアウトなどはたいへん参考になるものであった。

また、余談になるがアムステルダムでは研究室の卒業生でオランダ人と結婚したクラインヴェルト芳子さんに会うことができ大変懐かしい思い出話をする事ができた。なお、ご主人の Raoul Kleinveld 氏は私たちが畜大で搾乳ロボットの研究をしているときに来日していた技師である。



イギリス・ブリストルの障害者乗馬施設の厩舎内の馬たち



ブリストル障害者乗馬施設の屋内馬場



アムステルダムの障害乗馬施設の休養ルームから見た屋内馬場



オランダに住む卒業生
(クラインフェルト芳子さん)

キーワード：国際応用動物行動会議，障害者乗馬